



オーライ! ニッポンニュース

第8回オーライ!ニッポン大賞の選考結果の発表を受けて3月9日、全国大会を代々木で開催し全国から250名もの多くの参加をいただきました。平成23年3月15日

第8回オーライ!ニッポン全国大会開催

第8回オーライ!ニッポン全国大会を3月9日に代々木で開催致しました。オーライ!ニッポン大賞受賞者等、都市農村交流、地域活性化に関する実践者や事例発表を行いました。



養老 代表



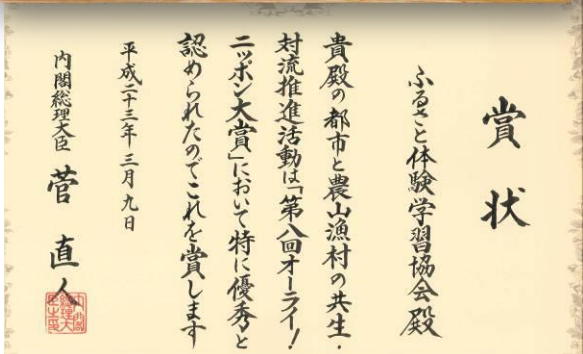
篠原農林水産副大臣

◆開催日時:平成23年3月9日(水)
13:30~17:30

◆開催場所:オリンピック記念青少年総合センターカルチャー棟「小ホール」
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1
◆参加費:無料

【プログラム】

- 13:30 開会
 - 13:40 第8回オーライ!ニッポン大賞表彰式
 - 14:00 第1部:先進的な共生・対流事例紹介(オーライ!ニッポン大賞受賞事例紹介)
 - 15:15 第2部:基調講演
講師 星野文紘氏
(山伏・羽黒山宿坊大聖坊)
 - 16:00 第3部:旅のトレンドをつくる
「着地型旅行」の事例紹介
(グリーン・ツーリズム商品コンテスト事例紹介)
 - 17:30 閉会
- 主催:オーライ!ニッポン会議、農林水産省
後援:総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、観光庁



フレンドシップ大賞—かみえちごふるさとファン倶楽部



第1部 先進的な共生・対流事例紹介

今年度のオーライ!ニッポン大賞の受賞事例発表を行い、第2部:基調講演は講師に修験道の星野文紘氏(山伏・羽黒山宿坊大聖坊)に講演いただきました。第3部:旅のトレンドをつくる「着地型旅行」の事例紹介は、今年度(第2回)の「グリーン・ツーリズム商品コンテスト」の受賞者より、催行したモニターツアーの様子、商品づくりで苦労した点、実施して判ったこと、今後の展開などを話していただきました。

- (1)「七戸にんにく里親物語」(青森県)・・・七戸町かだれ田舎体験協議会(七戸町)×青森通リズム株式会社(八戸市)
- (2)「【大人の楽校】いちのせきでタイムスリップ!～過去から現在・未来へ、つなぐ・伝える食体験～」

(岩手県)・・・たびれっじ推進協議会(一関市)×株式会社JT東北奥州支店(奥州市)

(3)「山の内雪まつり!!今年日本中からまつりを一緒に作ってくれるかた募集します!」大作戦(山形県)・・・株式会社ティー・ゲート(東京都)×山の内地域づくり協議会(村山市)

(4)「いすみツーリズム 2010 房総いすみで美と健康と癒し体験ツアー」(千葉県)

NPO法人いすみライフスタイル研究所(いすみ市)×近畿日本ツーリスト株式会社(東京都)

(5)「古の風に願いを乗せて旬の島食材を王都に集めろ! 舌岐の島歴史ぐるめぐりツアー」(長崎県)・・・舌岐体験型観光受入協議会(舌岐市)×株式会社農協観光九州グリーンツーリズム支店(福岡市)

オーライ!ニッポン大賞グランプリ決定!

第8回を迎えたオーライ!ニッポン大賞が去る3月に決定しました。

●**オーライ!ニッポン大賞グランプリ(内閣総理大臣賞)**は、ふるさと体験学習協会(岩手県久慈市)

●**オーライ!ニッポン大賞**は、特定非営利活動法人 塩谷町旧熊ノ木小学校管理組合(栃木県塩谷町)、東京農業大学 多摩川源流大学(東京都世田谷区)、財団法人紀和町ふるさと公社(三重県熊野市)、いこま棚田クラブ(奈良県生駒市)

●**オーライ!ニッポン大賞 審査委員長賞**は、砥山農業クラブ(北海道札幌市)、しずおか体験教育旅行(静岡県静岡市)、NPO法人 豊田・加茂菜の花プロジェクト(愛知県豊田市)、いなべ市農業公園(三重県いなべ市)、特定非営利活動法人 いえしま(兵庫県姫路市)、いなかインターンシップ(高知県高知市)

●**オーライ!ニッポン ライフスタイル賞**は、中村成子さん(島根県奥出雲町)、白松博之さん(山口県阿武郡阿武町)

●**オーライ!ニッポン フレンドシップ大賞**は、特定非営利活動法人かみえちご山里ファン倶楽部(新潟県上越市)、農業生産法人 株式会社信州せいしゅん村(長野県上田市)です。

●**グランプリ受賞のふるさと体験学習協会(岩手県久慈市)**は、太平洋に面し、約30万本の白樺群生林、クマヤムササビなどの野生動物が棲むブナやミズナラの原生林が広がる平庭高原、伝統の海女漁などが行われる小袖海岸など、山・里・海に囲まれた自然豊かで多くの伝統文化が残る街である。平成12年度から旧山形村が、過疎化対策の一環として交流人口の拡大による地域の活性化を目的に取組んだ教育旅行の受入事業を引継ぎ、旧久慈市との合併を機に、平成18年度にふるさと体験学習協会を設立。

地元、行政、旅行会社、学校との連携を強化するとともに、体験プログラムの開発を行いながら、教育旅行や体験活動の受入れ推進を図っている。原生林等を活用したエコトレッキング、森の一部をまるごと学校に貸し出し、専門家の指導の下で枝打ちや間伐など木の育ちやすい環境整備を行う林業体

験、森林の中を車椅子でも散策できるようボランティア精神に基づくフォレストボードの設置、首都圏と地元子ども達が交流して行う自然体験キャンプ、直接民家の方とふれあふ民泊体験等、豊富な体験プログラムを通じて、交流によって生まれる心の温かさや信頼感、机上では得られないことへの気づきの提供を目指している。



また日本短角牛の産直を契機に始まった首都圏消費者グループとの交流ツアーでは、生産者宅への民泊、自然体験、郷土料理作り等で生産者と消費者が結びつき、産直が継続されている。行政主体から行政との連携による民間主体の取組みとなり、また受入れも飛躍的に増加。平成 17 年度 4 校 1,190 人、同 18 年度は 6 校 2,500 人、同 19 年度は 13 校 4,980 人、同 20 年度は 16 校 5,477 人、同 21 年度は 16 校 5,447 人、同 22 年度 15 校 5,446 人、6 年間で 25,000 人を受入れ、交流事業を通じて地域住民の意識変化・意欲高揚につながり、地域経済の活性化、地域コミュニティーの活発化に大いに貢献している。行政主体から行政との連携による民間主体の取組みとなり、各主体との連携を強め、教育旅行の受入体制を強化。また首都圏消費者グループとの交流も行うなど、取組の内容の普及性、継続性、モデル性、オリジナリティも高く、他地域の参考となる点が数多くある点が評価された。

フレンドシップ大賞の特定非営利活動法人かみえちご山里ファン倶楽部(新潟県上越市)は、かみえち平成 13 年度に調査された「伝統生活技術レッドデータブック」で当たり前になっていた技術や文化の多くが数年で消えてしまうという事実が数値で現れ、自然の荒廃だけでなく、生活技術やコミュニティまでが衰退の危機にあることが共通認識となったことが大きな機動力となり、地元 80 名が発起人となって平成 14 年度に設立。「人間が生存に必要な資源の自給」を「10 のまかない」とし、地域で生きるための本質的な活動が、中山間地域が抱える課題解決と新たなコミュニティ創造に繋がると考え、地域内で起こることや課題全てを活動の対象に、基本理念である「山里の自然、環境、文化、地域産業を『守る・深める・創造する』」の精神で取り組んでいる。現在 8 名のスタッフがおり、年間 40～50 程度の地域行事や共同作業への参加とその様子の調査や記録、年間を通じて環境教育施設や水源森林公園の運営管理等を行うほか、環境教育事業、登山道整備・林道

整備・市道除雪事業等の地域振興にかかる事業も受託している。平成 16 年度からインターンシップの受入れを始め、これまで 60 名以上の学生が訪れている。



資源の余剰を活用し、小規模で多様な手仕事産業の創出を行うさまざまな事業を展開し、その中でも、NPO が借り受けた放棄田で地元講師から米作りの技術を学ぶ棚田事業(「棚田学校」「有縁の米」)には、市街地や首都圏から年間延べ 200 名程度が参加。また年間を通じて古民家の改修等に取り組む「ことごと村づくり学校」では、その卒業生が学んだ技術を活かし、自分で家を建て移り住む計画を進める人も出てきている。子ども向け環境教育・生存教育事業では、「自然と折り合いをつけて生きる作法」を学ぶコンセプトにプログラムを開発。その暮らしを生きた形で伝えるため地域住民が先生となり、スタッフはその技術や文化の通訳者として動けるように専門知識の習得とトレーニングを行っている。これこそが日本の環境教育の形として発信し、運営する 2 施設をあわせて小・中学校を中心に、年間 1 万人以上が訪れるなど高い評価を得ている。

その他にも、伝統行事再現事業(「横畑集落伝統行事『馬』」「里の結婚式」等)、「村に一流を」文化事業(「月満夜の神楽」「高橋竹山コンサート」等)など、生存技能や地域文化を学ぶ場として企画し、収益が地域コミュニティーの維持に還元できる仕組みになるよう取り組んでいる。NPO の活動を支える人々や連携団体は多岐にわたり、毎年講師や調査等で協力を得る地域の方は 100 名程度、地域行事、作業に関しては、町内会、地域協議会、青年団などの地域団体と連携がかかせず、文化活動や商品開発は、地元生産組合、神社組合、小・中学校等との協力で成り立っている。(「市民が創る環境のまち“元氣大賞”(特定)持続可能な社会をつくる元氣ネットよりご推薦。)



同じく**フレンドシップ大賞の農業生産法人 株式会社信州せいしゅん村(長野県上田市)**は、地域住民が運営主体となり、行政からの財政的な支援を受けずに『前例のないことを独創的に』と様々なアイデアで農村と都市の交流事業を展開。モットーは【共に野山を遊び、祭りに加わり、大地を耕す】で、常に来た人と一緒になって遊び働き、50・100 年後の農村の中山間地農村の存続を願って、都市住民の

方々に来てもらうことで成り立つ『サービス提供型農村』を目指しています。



交流を進めるには、美しい農村景観や環境の維持が必要であるとの認識のもと、荒廃農地の解消・再生を積極的に取り組んでおり、荒れた桑園の復畑に希望者を募り、「せいしゅん村開拓団」を結成し、8 反分を開墾し蕎麦を育て、そば道場も開催。食の風物詩「寒さらし蕎麦」の商品化で蕎麦焼酎を製造特許申請するなど、商品開発・販売に繋げている。移住希望者にはふるさと回帰予備校を開講し、農業や農村の現状等の本音から、移住の手順や準備、体験談や失敗談、地域との付き合い方等を詳しく手ほどきを行っている。2006 年からは「ほっとステイ」参加者へのアンケート調査結果から「癒され感」の数値化を計り、信州大学感性工学科の協力のもと、農村体験には「癒され感」を向上させる効果があることを実証。この癒し効果を「農村セラピー」と呼び、アンケート数値は『生き方満足度』なので、この数値を『セラッチ』と呼称し、ネット上で体験のビフォーアフターを計測できるシステムを立ち上げ、『セラッチ』を活用して更なる農村振興を図ることを目指し、長野県の支援のもと、県下全域に呼びかけて、農村セラピー協会の設立を行った。「ほっとステイ」には海外からの訪問者数も増加しており『国際青少年交流農村・宣言』を行い、アジア諸国等から 2010 年は 1,021 人が訪れた。



またイオン労働組合が定期的に訪れ、東京の楽団員約 30 人が訪れて、施設訪問や無料コンサートを開催する等の新たな交流も生まれている。これまでの来訪者数は延べ 40,000 人を超え、「人々に来てもらうことで成り立つ農村」としての自信も生まれ、受入れ家庭数は延べ 121 軒、常時受入れが可能な家庭は 60 軒を超えている。「ほっとステイ」の受入れ組織(民間)が長野県下 7 地区の市町村に広がり、「長野県ほっとステイ協会」を組織化し、年間 11,000 人以上を受入れ、周辺地域の活性化にも寄与している。(「JTB 交流文化賞」株式会社ジェイティビーよりご推薦。)

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町 45 番地
神田金子ビル 5 階 (財)都市農山漁村交流活性化機構
内 オーライ!ニッポン会議 TEL03-4335-1985